

## アカデミア文学・語学編 100 号記念に について思うこと

佐々木 剛志

アカデミア文学・語学編が 100 号を迎えるについては感慨深いものがある。勿論のこと、私はその創刊号について何かをした訳でもないし、できた訳でもないが。

ただ一時期、アカデミアは掲載論文が無審査なので、研究業績として認めがたいのではないかという懸念も一部にはあったようであるが、それならばアカデミアを無くしてしまえというのが私の反応であった。なぜかと言うと、刊行しておきながら、その存在、意義を認めないならば、それにどんな意味があるのかという論理に基づく反応である。

さて私の大学院時代はアメリカではあったが、Working Papers が母校の専攻学科で発刊され、たくさんの大学院生による論文を含む意欲的論文が寄せられ、分野に貢献する所、大であった。これも全くの無選考という訳ではなかったが、その意図は大学の研究科の成果をいち早く知ってもらう所にあったと思われる。

その頃はまだタイプライター時代で、しかも多くは手打ちで、電動タイプライターが出始めたか、普及の兆しを見せた位の時であったので、論文の体裁、そしてフォントも様々で、それは恐らく写真印刷の論文集であったと記憶している。従って初めて手にする人はそれが普通の本、雑誌のような活版印刷の体裁を取っていないので初めは「何だ、これ？」という反応をするが、読んで行くうちにそんなことは忘れ、論文の中身

の方に引き込まれて行くという時代であった。論文の参考論文にするものの多くもこうした Working Papers の形を取っているものもたくさんあった。何よりもいいのは活版印刷に比べ、研究者の研究成果を手早く知ることができた点にあった。

私が南山大学に赴任してアカデミアを手にした時は、当然のことながら、この Working Papers のことを思い起こした。というのも、アカデミアは活版印刷なので、その性格上フォント等の多様性は無いが、注の付け方には脚注、文末注が投稿者に任されていたので、私が持っている活版印刷の概念とは違うなと思ったのを思い起こす。注は私の好みは横書きの場合、脚注で、文末注だとそこまでページを繰らないといけなというのがその主な理由である。縦書きの場合は文末注にならざるを得ないのだろうが、ただ、横書きの場合でも、文末注の好きな人は、注は読みたくなければ読まなくてもいいという理由か、あるいは印刷の都合上、文末にまとめた方が、注が本文の長短に関係なくできるというか、あるいは長い脚注だとページの体裁が見苦しくなるという理由であろうから、究極的には好みの問題というのが私の結論であるから、なかなか決めがたい所があるが、タイプライターの時代でも、学会誌では投稿規定にスタイルシートがあって、そこに投稿する時は、そのスタイルシートに従うというのが約束で、それから外れては採用の考慮もしてもらえないというのが普通であったので、アカデミアを手にした時にあれっと思ったのであろう。

アカデミアは南山学会の学会誌だと思うが、これは大学内の学会なので、審査ということになると、難しい所があるので、したとしても体裁だけということになると思う。たとえ、本人の不注意による中身の致命的矛盾があったとしても、それは執筆者自身が投稿前に判断すべきことであって、よほどひどくない限りは他人が行うべきことではないと思う。また、同じ大学に勤務していても構成員が違う学説、見方をするのは好

ましいことで、それによって論文の採択が左右されることは望ましいことではない。

今はコンピューターでいろいろなことができるので、それを考えるとワープロの時代、その前のタイプライターの時代とは大いに違う。タイプライターの時代だとせいぜいが編集を容易にできるのが、章立てで、各章の初めを新しいページにする位で、指導教員等から修士論文、博士論文の訂正の要請があった時は少なくともその箇所から章の終わりまでを改めて手で打つというのが普通であった。

その時代に比べると、今は夢のような時代で、アカデミアもスタイルシートを作り、それに基づいた論文を投稿するという形を取ってもいいのではないだろうか。ただ、スタイルシートの確立には議論百出になるかもしれないが、それはそれで議論に値すると思われる。体裁の統一後の中身の勝負は投稿者の良心(?)の問題になるというのが私の考えである。

それともう一点は投稿論文に対する批判、あるいは「～を読んで」式の投稿、またそれに対する反論があってもいいのではないかと思う。これについてはアカデミアは学内学会誌なので、投稿者に直接言えばいいじゃないかという考えもあるが、それだと個人的になる可能性が多くあり、個人的なしこりを残すことにもなりかねないので、私は一度投稿されたものは書いた人を離れた客観的存在物となるので、同じ客観的刊行物の中で行われた方が、客観的であり、これを通して、投稿者も至らぬ所があった場合は反省し、あるいは更に議論を進めることができるので、刊行物のレベル向上にも役立つと思われるというのが私の考えである。

こんな所がアカデミア文学・語学編 100 号記念について思う所で、それは別として南山学会またアカデミア文学・語学編、そして他分野のアカデミアもますます発展して行くことを願ってキーボード打ちを終わることにしたい。